

題名 出会いに感謝を。

作者名 ゆい

海。この言葉を聞いたり、海のそばを通ったりすると、私の中で幼い頃のある大切な記憶がよみがえってくる。ただ、最近は私自身も忙しくて忘れていたのだが、この「こども海の文学賞」で作文を書くにあたって、また思い出すことが出来た。

私は、小学四年生くらいの頃に一度、浜辺で出会った人から本を貰ったことがある。その日は幼かった私にとってすべてが衝撃的で、今でも鮮明に私の記憶に残っている。

少し肌寒い、秋晴れの日だったと思う。私はその日友達と、海の近くの公園で遊んでいた。しかし、遊びに飽きたのか、私達はなぜか「海を見に行こう」という話になった。当時の、小学生の私達にとって「海に行く」という行動は、とてもロマンの溢れるものであっただろうから、このような奇怪な行動にもしかたがないと思って見逃してほしい。

しかし、私達の目の前に広がっていたのは、いつも学校や家から見えていた、あのキラキラしたきれいな海ではなく、ゴミに埋もれた汚い海岸だったのだ。想像とかけ離れた景色を、初めて目の当たりにした私は、そのとき大きな衝撃を受けた。それは、きつと私の隣に並んで見ていた友達も同じように感じていたんだと思う。だから、私たちは一度家に帰ってゴミ袋を取ってき、またその海岸で集合した。

そうして、私と友達、小学生二人での、初めてのゴミ拾いが始まったのだ。驚きの連続だった。大量のペットボトルはもちろん、家電製品や自転車、大きいものから小さいものまで大量のゴミが流れ着いていた。そしてすぐに、私達の持ってきたゴミ袋はいっぱいになった。当時、私達は「海岸の全てのゴミを集めてやる」という浅はかな考えを持っていたのだが、そのとき、それがあまりにも無謀であることを知った。ただ、諦めはしなかった。友達と相談し、「今日はできる限りのゴミを集めよう」という話になった。

しかし、私達は新しいゴミ袋を持っていなかったもので、悩んだ末、私は遠くで私たちと同じようにゴミ拾いをしていたおじさんに、声をかけた。「ゴミ袋、余ってませんか？」そう言うと、おじさんは初めすごく驚いた顔をして、それから「やっぱりゴミ拾いしててくれてんね。ほんまにありがとう。」と目に涙を浮かべながら、私達に感謝を伝えてくれた。そこまで感謝されると思っていなかったもので、少し照れくさかったのを今でも覚えている。

ただ、おじさんは余りのゴミ袋を持っていなかったもので、「この袋に入れてくれたらいいよ」というおじさんのご好意に甘えて、三人でゴミ拾いをする事になった。お互いに軽く自己紹介し、そのとき、おじさんが西谷さんという名前であることを知った。

そして、私と、友達と、西谷さんの三人でのゴミ拾いが始まった。ゴミ拾いをしながら、私達は西谷さんとたくさんのお話を話した。毎週毎週、海岸のゴミが増えていくこと。中国や韓国など、色々な国からゴミは流れ着いているということ。他にも、たくさんのお話を教えてもらった。当時の私にとって全てが衝撃的であった。

夕焼けのオレンジ色の光が眩しくなってきた頃、ようやくゴミ袋がいっぱいになり、ゴミ

拾いは終了した。西谷さんはいつも、集めたゴミをまとめて捨てに行くらしく、帰り際、私はゴミをまとめて置いてある場所に案内してもらった。そこには、以前に西谷さんが集めたとされる、かなりの数のばんばんのゴミ袋が置いてあった。今まで、これだけの量のゴミを一人で集めていたのかと、幼ながらに私は、西谷さんの信念に心を動かされた。そうして、その日は解散した。これらの出来事は、私にとってものすごく色濃い出来事で、情熱、信念というものを、初めて間近で感じた瞬間であった。

しばらくたったある日、私は外を歩いていると、近所の知り合いのおばさんから「ゴミ拾いしたんだってね。偉いね。」と声をかけられた。少し恥ずかしかったが、とても嬉しかったのを覚えている。私はそのとき、その言葉とともに、おばさんからある大きな茶色の封筒を受け取った。開けてみると、中には一冊の本が入っていた。「西谷さんからだよ」おばさんにそういわれた。

友達の分と合わせて二つの封筒を受け取り、家に帰って、中に入っていた本を読んできた。題名は「海と空の約束。」まるで西谷さんのような、優しく温かいお話であった。

西谷さんは本名、西谷寛さんという。この作文を書くにあたって初めて知ったのだが、「海と空の約束プロジェクト」の代表で、長年自然環境と向き合い、環境保全活動に従事してきたすごい方であった。こんな方と出会えて、色んなことを教えてもらえて、本当にすごい経験をさせてもらえたな、と感じた。

海。私は海と聞くと、淡路島と明石海峡大橋をバックにした、太陽の光を浴びてキラキラと反射する海を一番に思い浮かべる。これは、私が住んでいる明石市だからこそ、日常的に見られる景色なんだと思う。どのような形になるかは分からないが、この町の海を守っていききたい。そう強く感じた。

あの日から五年がたった現在、私は時折あの日のことを思い出す。今でもあの日の出来事と、あの時貰った本は、私の宝物である。この出来事を、思い出させてくれた「こども海の文学賞」を開催してくださった多くの方々に、厚く御礼申し上げます。そして西谷さん、本と貴重なお話、経験を本当にありがとうございました。